

朝鮮総督府編纂『普通学校朝鮮語讀本』の語彙

朝鮮 総督府에서 編纂된『普通 學校 朝鮮語 讀本』에 보이는 語彙

佐 野 三枝子

本稿에서는, 朝鮮 総督府에서 編纂된『普通 學校 朝鮮語 讀本』本文과「漢字解」에 보이는 語彙를 對象으로, ‘山뫼, 江마름, 百은, 千즈믄, 兄믄’ 등, 그 釋이 消失된 單語와 現代에 이르러서 單語 自體가 交替한 것을 어떻게 記錄하였는가 그 樣相을 考察하였다. 本考察을 통해 다음과 같은 事實을 얻을 수 있었다. 먼저「漢字解」에서 ‘山뫼, 兄믄’은 古語를 維持하였으나 本文에서는 漢字語로 記錄되었다. ‘江마름, 百은’도 漢字語로 代替되었고 釋 ‘은’은 意味 變化를 일으켰다. 다음에 漢字語와 固有語 두 가지가 共存하는 單語가 있었고, 또 ‘아우, 交椅, 掃除, 日氣, 生徒’ 등 單語가 現代 韓國語에서는 ‘同生, 椅子, 清掃, 學生’ 등으로 交替하였다.

이러한 點을 통해서 現代 韓國語의 變化 樣相에 대해 具體적으로 確認할 수 있었다.

1.はじめに

漢韓辭典は各漢字の字訓と字音をこの順に載せている。16世紀中葉に、漢韓辭典と同様の形態の書物が初学者の教育書として使われていた。まず『千字文』により学ぶ。次に『童蒙先習』、『類合』を学び、さらに、『新增類合』、『訓蒙字會』などに進んでいった。その後、様々な教育書が刊行され、19世紀後半になると、学部により『國語教科書』が編纂された。そして、20世紀初葉には朝鮮総督府により『普通學校朝鮮語讀本』が編纂された。この『普通學校朝鮮語讀本』の各巻末には、附録として、各項目の新出漢字に対する「漢字解」が付してある。その中には、消失した單語を載せたものがあり、また、『類合』、『新增類合』、『訓蒙字會』などとは字訓を異にするものもある。

現代朝鮮語の資料に留められた單語から、このように古語の姿を知ることができるものがあり、單語の歴史や変遷を学ぶことは、現代朝鮮語の理解にも通ずることであると考える。本稿では、『普通學校朝鮮語讀本』本文の語彙と「漢字解」の字訓を対象にし、‘山、江、百、千、兄’などの字訓のように、消失した單語をどのように記録したか、そして、現代朝鮮語ではあまり使われなくなった單語にどのようなものがあるか考察する。

2. 『普通學校朝鮮語讀本』の語彙の考察

資料の体裁については佐野(2013)で述べたため省略するが¹⁾、一頁当たりの行数と一行の字数を示し、各巻の内容を目次により紹介する。

『普通學校朝鮮語讀本』六巻は1923年から1924年に亘り、発行された。巻一は1923年7月10日、巻二は同年7月3日、巻三は同年6月5日に発行された。巻四からは翌年の1924年1月20日に、巻五は同年1月31日、巻六は同年2月20日に発行された。国漢文混用体である。

本文の巻一、四十四項目以降と巻二は、ほぼ一頁7行、一行15、6字である。巻三と巻四は一頁9行で、一行は18、19字である。巻五と巻六は一頁9行、一行19、20字である。「漢字解」は附録として巻末に付してある。一頁10行で、一行は20、21字である。字訓と字音は各漢字の下に小字で二行に示している。漢字数は全部で1773字である。

目次は次のとおりである。ただし、巻一の一から四十三までと四十九、五十は題名を付していない。各巻末に漢字数を記す。

『普通學校朝鮮語讀本』目次

巻一 四十四 해 四十五 선생님 四十六 장 四十七 비행기 四十八 집오리 五十一 달 五十二 선생님과生徒 五十三 저녁 인스 五十四 아침 인스 五十五 복습 五十六 땀이 五十七 연 五十八 우리 신동이 五十九 열두달 六十 슈남이와 복동이 六十一 닭 六十二 수수떡기 附録「漢字解」16字

巻二 一 寒食 二 슈양버들 三 봄노래 四 친절한女生徒(一) 五 친절한女生徒(二) 六 개고리 七 俚諺 八 龍吉이와 鳳吉이 九 모내기 十 잉어 十一 小野 道風 十二 약물 十三 별 十四 숨박곡질 十五 집안 일의 助力 十六 흑 쉔 이약이(一) 十七 흑 쉔 이약이(二) 十八 天長節 十九 秋收 二十 조개와 황새 二十一 물방아 二十二 四時 二十三 각시놀음 二十四 눈 二十五 설 二十六 얼음지치기 二十七 汽車 二十八 慾心 만든 개 二十九 壽男 이의 善行 附録「漢字解」120字

巻三 一 植木 二 소와 말 三 나물 캐기 四 나뭇 五 제비 六 率居 七 喜雨 八 그네 九 낙시질 十 편지 十一 白頭山 十二 秋夕 十三 달 十四 매암이와 개미 十五 菊花 十六 運動會 十七 朴赫居世 十八 말 하는 남생이(一) 十九 말 하는 남생이(二) 二十 말 하는 남생이(三) 二十一 問病 二十二 京城 二十三 老人의 이약이 二十四 집회 效用 二十五 紀元節 二十六 俚諺 二十七 여호와 가마귀

附録「漢字解」253字

卷四 第一 이웃四寸 第二 京城從弟에게 第三 朝鮮의地勢 第四 俚諺 第五 永才와盜賊 第六 幼兒의所見 第七 夏節衛生 第八 驟雨의歌 第九 先生님께 第十 麻 第十一 新義州에서 第十二 山上眺望 第十三 材木 第十四 김장 第十五 注文書 第十六 畫工良秀 第十七 人事 第十八 義狗 第十九 沈清（一） 第二十 沈清（二） 第二十一 沈清（三） 第二十二 友人의親喪에弔狀 第二十三 愛親 第二十四 釜山港 第二十五 師의恩 附録「漢字解」527字

卷五 第一課 燈火 第二課 花遊의請邀 第三課 獅子와山鼠（一） 第四課 獅子와山鼠（二） 第五課 一家和睦 第六課 韓石峯 第七課 清潔 第八課 妹弟에게 第九課 夏期放學作別 第十課 人蔘과煙草 第十一課 湖南旅行 第十二課 安珣의禁巫 第十三課 廢物利用 第十四課 쌀내 第十五課 格言 第十六課 富士山과金剛山 第十七課 森林 第十八課 新鮮한空氣 第十九課 子在家上父書 第二十課 順序 第二十一課 金剛石 第二十二課 井底蛙 第二十三課 禮儀 第二十四課 分數물으는토서 第二十五課 新羅의古都 第二十六課 勤儉 附録「漢字解」491字

卷六 第一課 動物과植物 第二課 四節의노래 第三課 徐敬德 第四課 誠實 第五課 水의旅行 第六課 種痘 第七課 孔子와孟子 第八課 開城 第九課 水害中間候 第十課 七夕 第十一課 朝鮮의行政官廳 第十二課 納稅 第十三課 棉 第十四課 朝鮮地方名 第十五課 公德 第十六課 甘藷 第十七課 平壤에서 第十八課 李退溪와李栗谷 第十九課 鐵의談話 第二十課 小話二篇 第二十一課 雨森芳洲 第二十二課 講話會의請邀文 第二十三課 自活 第二十四課 玉姬의慈善 第二十五課 善友 第二十六課 猫와虎 第二十七課 紙幣와爲替 附録「漢字解」366字

卷四からは学ぶべき漢字や熟語が増えている。文章の内容や文体にもよることであるが、卷四以後には、漢字語と、それに対応する固有語が記されている例もたくさん見られる。たとえば、指示詞‘此、其’とそれに対応する‘이、그’である。この他に、‘事、일’、‘者、人、사람、이’、‘時、때’、‘身體、몸’、‘隣家、이웃’などの例も見られる。それぞれの用例を、単語、用例、卷数、課数、頁数、行数の順に何例かず提示する。

此 此를 卷四 十31-6	此地方 卷五 十一47-2~3	此는 卷六 十二47-3
이 이에 卷四 五16-6~7	이때 卷五 五20-4	이外에 卷六 一1-6

其 其時에 卷四 十八66-3~4	其他 卷五 十三54-3	其後에 卷六 二十七111-4
그 그날밤 卷四 二十70-7	그힘을 卷五 十七65-4	그耕作을 卷六 十三50-1

事 等事 卷五 二十三83-7 一事 卷六 三12-1

일 엇더한일에든지 卷四 一1-7 일도 卷六 十一38-2 셋치는 일 卷六58-4

者 救助하는者 卷四 一2-5 自己를 爲하는 者에게는 卷五 十二50-4

自己를 薄待하는 者에게는 卷五 十二50-5 信從하는者 卷六 六-3

人 人에게 卷五 二十三82-5 卷六 五20-1 人을 卷六 四14-7

사람 사람들이 卷一 四十六47-3 사람 卷四 一2-1

사람이 卷五 二十三82-4 卷六 一1-6

이 돕는 이를 卷五 十五57-6 아는 이 卷五 十七67-2,9

卷六 二十三 95-4

時 一時에 卷二 二十八76-7 幼時로부터 卷五 六23-8

學할時에 卷六 十八75-1 五歲時 卷六 二十四97-7

세 그 세 卷二 二十八76-5 十三歲세에 卷三 十八50-6

서늘한세에 卷四 七24-3 볼세에 卷五 二十五96-5

隣家 隣家の 卷四 一3-8 隣家로부터 卷四 十六54-8~9

이웃 이웃 卷四 一1-3,4,5,6, 2-1,6,9 3-3

身體 身體에 卷四 七23-9,24-6 身體가 卷六 二十三 95-5

몸 몸은 卷六 五18-5

文体は国漢文混用体を基本としてはいるが、これらの例は、日常生活で実際に使われる単語が少しずつそこに反映していることを表わしていると考ええる。

次に、単語が消失したもの、「漢字解」の中でㄱ末音名詞であったもの、および、現代朝鮮語で単語が交替しているものを検討する。消失した単語とㄱ末音名詞については、李基文(1999: 12, 17, 118, 164, 218, 241)に従う。

まず、単語が消失したものの用例の一部を次に示す。

山되ㅎ 山 山에 卷三 一3-1, 山이오 卷三 十一32-9

山이나 卷四 七24-3 卷六 五17-7 山과山이 卷四 十三44-5

먼 山 卷二 十六39-7 卷三 三10-6 붉은山 卷三 一2-9, 4-8

此山 卷五 十六60-7, 61-5 山岳 卷五 四20-4

山川 卷二 六13-6 江山 卷六 十七 69-8 山中行人 卷六 五17-7

- 山河 卷五 二十五92-6
 산 卷一 二十七28 노흔 산 卷一 三十一32-1, 五十一52-6
 뒤동산 卷二 三 5-7
 江マ름 江 江도 卷四 三12-2,4,5,7,8 十一35-6,36-5
 큰江 三12-4 大江 卷四 十一37-2 江岸 卷六 十七67-5
 江流 卷六 十七67-6,7 江山 卷六 十七69-8,72-1
 大同江 卷六 十七66-26,67-3,70-9~71-1 大同江口 卷六 十七70-7
 長江山이오. 卷三 十一33-4 漢江이 卷三 二十二68-3
 시내 卷一 三十三34, 五十51-3 卷四 四43-4 卷六 五18-1
 압시내 卷四 九28-6
 시내물 卷三 七20-7~8 卷四 九26-5 卷五 四20-6
 내 卷一 五十一52-7 卷四 十八66-9 압내 卷三 九26-3
 川 卷六 五20-1 山川 卷二 六13-6 溪川 卷六 九36-7
 개천 卷四 十九69-1
 山河 卷五 二十五92-6
 百은 百 千百幅 卷四 十六56-6 百人 卷五 五23-1
 千즈믄 千 千年 萬年 卷三 十三38-6,7,9 千辛萬苦하야 卷五 二十六99-8~9
 千萬금 卷四 十七60-2 千事萬慮로 卷四 十七81-3
 一萬二千尺 卷五 十六58-2 千번 卷六 二十二90-7
 千번만 卷六 二十二90-4
 兄믄 兄 卷三 二十60-5,61-5,63-4,63-9,64-4,7 二十一65-1
 仁兄 卷三 十30-1,31-2 吾兄 卷六 十七70-1
 형 卷二 八17-5
 兄님 卷二 八18-3 (2) 卷三 九26-2,8 27-3,28-4 十八51-1,3,8
 卷三 十九 59-3
 형님 卷一 五十四56-6, 57-5 卷二 一1-7

「漢字解」での‘山’の字訓は‘되’で、‘岳・嶽’と‘峽’も‘큰되、되、두되’であるが、漢字語‘산’による‘嶠・崧산능흘’もある。本文の用例はすべて漢字語‘山’である。李基文（1999：17）は、‘되（뎡）’は漢字語‘山’に迫り出されたが、墓の意味として、‘뎡자리’、‘되를 쓰다’などの現代語に残っていると述べている。卷三には墓を意味する単語が出てくるが、‘山所에 卷三 十二35-7, 卷三 十二36-3’であり、やはり漢字語‘山’を持つものである。

‘마름’は‘江’に替わったが、全在昊（1992：164-174）はそれを次のように解説している。中世語までは‘마름’は‘江’の他に、まず、‘河’の意味を包含し、次に、‘湖’の意味も包含してい

た。そこから‘ㅁㅁ’の意味としては‘江’がまず分化した。漢字語が盛んに使われるようになり、16世紀後半期に漢字音を取って‘강’になった。‘江’の分化とともに‘河’と‘湖’も分化したが、‘河’の為には‘하슈、믈、하천’が生じ、その後、‘川’に近くなって、‘하천、내’に合流した。

「漢字解」を見ると、‘江큰내강’であり、‘川내천’であって、‘ㅁㅁ’は記されておらず、また、‘ 시내、내、川、そして、개천、山河’も使われていることは、『普通學校朝鮮語讀本』が刊行された時期を考えると当然のことと考えられる。

‘百、千’の字訓は‘온、즈믄’であるが、本文もすべて漢字語が記され、古語は見られない。李基文（1999：118）によると、これらの単語も漢字語に押され、15世紀の文献にも‘즈믄’は見られたのだが、その後、姿を隠してしまった。‘百온’は、現代語では‘온’、‘全体、みんな、全て’などの意味に変わっている。朴秉喆（1997：142-7）は、訓によって使われていた語彙が日常語において意味変化を起こしたことが一時的な原因になって、訓の代替が行なわれたものと解説している。巻四に古語‘원’の例がある。‘원집안이다갓뵈하야苦待합니다. 卷四 二8-7’である。

‘兄’の字訓は‘뎡’である。しかし、本文には漢字語が記録されている。全在昊（1992：250-283）によれば、‘兄’の語形は14、5世紀は‘뎡’と‘형’であり、‘뎡’は一般名詞の他、合成語形成の先行要素として使われていた。‘兄’の語形としての‘뎡’は15、6世紀から19世紀まで維持され、20世紀に入って‘형’に交替した。‘兄’の語形としての‘형’は15、6世紀から‘兄、형’などとしてよく使われ続けて現代語に至り、現代語では‘兄’と連合する代表的な語形である。『普通學校朝鮮語讀本』においては交替した‘兄、형’のみ記録されている点、変化への対応が早いようである。

次に、「漢字解」の中でㄱ末音名詞であったものを検討する。佐野（2013）が『普通學校朝鮮語讀本』本文の‘ㅎ’の表記を考察した際には、ㄱ末音名詞はすべて‘ㅎ’が脱落しており、数詞‘ひとつ（하나ㅎ）’だけが‘ㅎ’の痕跡を留めていた。単語の種類および用例数が多いので、ここでは‘野ㅁㅁㅎ / 드르ㅎ’についてのみ検討する。

野ㅁㅁㅎ / 드르ㅎ 들 山이나 들이나 卷二 二十四63-4

들에 卷三 十二34-5 들로 卷四 七24-3

全在昊（1992：129-136）によると、‘野드르ㅎ’は‘ㅁㅁ’と‘드르’が使われていたが、‘ㅁㅁ’が消滅し、16世紀後半から‘들’に交替した。‘드르’は‘ㅁㅁ’の消滅により、18世紀後半から‘들’に交替した。「漢字解」は20世紀初葉に編まれたものであるので、用例はすべて‘들’である。

ところで、現代朝鮮語では単語が交替しているものも数多く見られる。その中で、親族名詞などの用例を幾つか以下に示す。

- 姉누나 누님 卷三 十八54-7,9 十九 55-8,57-9,58-2
- 弟동생 아우 卷二 八17-3 卷三 十二36-7 十八51-2,5,6,7 52-4,8
53-6,54-4,55-1,8 十九56-4,8 57-7 59-4 61-9 二十64-5,6
弟 卷三 九29-2,9 卷三 二十一66-1,67-4 卷五 二6-3
卷六 十七64-6 十七72-1,4
同生 卷四 六18-8
- 妹동생 누의 卷三 十二36-8 十八 51-7,52-1 二十60-6
- 姉妹 卷五 五21-4
- 兄弟 卷五 五21-4,22-1
- 兄姊 卷五 五21-6,7,9
- 弟妹 卷五 五21-6(2), 9, 22-1
- 子息 조식 卷四 四14-7 卷五 五21-5(2),8(2)
女息 卷六101-9
- 아들 卷六 十九 73-9,99-7, 二十四98-2 아들 兄弟 卷二 十五36-4
- 兒孩 兒孩 卷二 十五36-6,37-5 二十九78-1,79-1,4
兒孩들 卷二 十四33-2,6 卷六 二十四97-7
어린兒孩 卷二 二十九77-6 卷三 十七49-9 二十二71-2
ㄹ히 卷一 三十六
兒童 卷六 六24-2
어린 것 卷六 二十四99-9
- 子 子 卷五 十八71-2,7
- 幼兒 卷六 六18-7
- 女兒 女兒 卷四 十九71-9 卷六 十一38-4, 二十四101-1
子女 卷六 六24-2,25-2
- 女子 卷四 十九68-2
계집 下人（들） 卷六 二十86-4,6,7,9 88-3~4
小女 卷四 二十一80-3
婦女 卷六 六25-1
- 父母 父母 卷三 十三38-5,8 卷五 五21-4,5(2),7,8~9 卷六 三8-7
卷六 二十三96-4~5
父母님 卷四 二十五92-2,4,6,7
- 母 母 信用의 母 卷六 四15-1 其母 卷六 二十四97-7
母親 卷三 十八51-6,52-1 卷四 十九68-3 卷五 六24-2,4,5~6
25-6, 26-7,27-3,5~6 卷六 十八74-8 二十四98-4,6

99-1,4,6 100-3,101-3,102-6,103-3

母側 卷六 二十四99-5

어머니 卷三 十八53-1,5 十九 55-8,57-1,3~4 二十60-6

卷四 十三47-6,48-3,5 51-1 어머님세서 卷五 六26-3

母子 卷六 二十四97-4,100-7,103-7

父親 卷三 十八51-3 卷四 十九68-3,70-4 卷六 二十四97-7

아버지 卷四 十三48-6 十四51-1 十九70-4 二十73-7

父子兄弟 卷五 七30-4

‘兄’については先に検討したので省略する。全在昊（1992：258-283）と趙恒範（1996：275-293）に従って交替の様相をまとめる。‘弟’の語形は15世紀では‘아☆’であり、平称であった。これは、一般名詞の他、合成語形成の先行要素として使われていた。その後、‘앗、알’などの形が使用され、16世紀末に‘아○’になり、19世紀に‘아오（아우）’に変わって今日に至った。しかし、20世紀に入ってから、16世紀に登場し、同腹（肉親）の意味に使われていた語形‘동생’と交替した。現代朝鮮語では‘동생’が優勢である。

‘아우’は‘卷二、卷三’に多数見られ、‘弟、同生’は卷三以後に多い。また、卷三十八課と十九課の内容には‘兄’と‘弟’が登場するが、‘兄’を漢字語‘兄’によって記し、‘弟’は‘아우’と記している点、注目される。‘兄’は‘同生’に比べ、‘兄’の意味を持つようになってからの歴史が長く、生活に馴染んで来ているものと考えられる。

親族名詞の‘父、母’も漢字語とそれに対応する固有語‘아버지、어머니’が見られる。「漢字解」では‘아비、어미’である。趙恒範（1996：57-132）は‘母어머、어머니’について、次のように述べている。近代語後半に卑称の‘어미、어멈’、平称の‘엄마、어머니’、尊称の‘어머님’が使用されており、‘엄마’は幼児語、‘어머니’は成人語として区別されていた。そして、この体系が現代語に移行した。ただし、尊称の‘어머님’と平称の‘어머니’の使用は減り、平称の‘엄마’が平称を代表している。そして、‘어미、어멈’は特殊な環境でのみ用いられた。‘父아비、아버지’もほとんど同様である。近代語後半に卑称には‘아비、아뻘’が、平称には‘父아바니、아바지、압바’などが、尊称には‘아바님’が配定されていた。このような体系がほぼそのまま現代語に移行したが、卑称である‘아비、아뻘’と尊称である‘아바님’は特殊な場合にのみ用いられ、主に平称の成人語‘아버지’と平称の幼児語‘아빠’が使用される。固有語‘아버지、어머니’は会話文に多い。先に検討したように、日常の言葉のやり取りの中で頻繁に使われる単語が入って行っていると考えられる。

‘兒孩’は「漢字解」でも‘○히’であり、‘兒童’の他、俗語であるが、‘어린 것’もある。‘계집下人’は‘女子’に含めて示したが、中世語では、‘계집’は‘女、妻’を意味し、「漢字解」では‘女、姫’の字訓に記されている²⁾。‘女’を表わす単語には漢字語の‘女子、小女’も見られる。

さて、1895年から1907年の間に学部により編纂された、国語教科書と修身・倫理教科書は、『普通学校朝鮮語読本』より17、8年から28、9年前の教科書であり、‘・’の表記、ㄱ末音名詞を維持するものがあること、語彙などからも、近代朝鮮語から現代朝鮮語への変遷の様相を知ることができるものである³⁾。そこで、親族名詞などの例とㄱ末音名詞の‘ㅎ’を維持している例などを参考までに提示する。これらの教科書の書誌事項は佐野（1999）で紹介した。ここでは教科書の発行目的と教科書の性格などについて簡潔に述べる。

『國民小學讀本』は1895年梧秋に学部で初めて編纂刊行された新教育用の国語教科書である。『小學讀本』は1895年仲冬に、『(新訂) 尋常小學』は1896年2月に学部編輯局で新刊した教科書である。『普通学校學徒用修身書』は1907年2月に学部で直接発刊したものである。すべて国漢文混用体である。

金億洙（1979：59,78）によれば、各国語教科書の発行目的と教科書の性格は次のとおりである。初めに刊行された『國民小學讀本』は、新知識の普及を目的とする高学年用国語教科書である。そして、甲午更張後、急速な西洋文物の伝来により、新知識を急いで普及させようとして、国漢文混用の文章を導入してこの時期の国民に国語意識を鼓吹したと特徴をまとめている⁴⁾。続いて刊行された『小學讀本』は倫理観確立を目的とし、修身教科書の性格を帯びている。そして、『(新訂) 尋常小學』は新教育実施を目的とする初等学校国語教科書である。

以下に、『(新訂) 尋常小學』に記された親族名詞などの例と、『國民小學讀本』と『(新訂) 尋常小學』でㄱ末音名詞の‘ㅎ’を維持している例を示す。『小學讀本』には該当する例はなかった。

親族名詞などの例 『(新訂) 尋常小學』（1896年）

아버지 卷一 十八前1 卷一 二十六前5 卷一 二十七前2 어미 卷一 十八前2,4
 맞아들 卷一 十八前1 맞팔 卷一 十八前3 아우 卷一 十八前1,4
 누의 卷一 十八前4,4-5 아들三兄弟 卷一 二十後8 아희들 卷一 二十六前1
 동모 卷二 目錄, 卷二 九後5,7 卷二 十前2,5

ㄱ末音名詞の‘ㅎ’を維持している例 『國民小學讀本』（1895年）

나라ㅎ 나라히 十二前9
 나ㅎ 나히 三十九後8 五十四後7
 ㅅㅎ ㅅ히 十二前3 十五後7 十九前 六十二後10
 ㅈㅎ 二十一前2 六十七前7 ㅈ히니 六十二前5
 ㅈㅎ 五十前5 六十八後6 六十九前7
 ㅈㅎ 二十七前6 三十七前6 三十七後10 五十後3 七十前1
 ㅈ히로 十二前3 六十二後2

우ㅎ 懸岸 우희자거날 十一後10 우희불은 二十一後3 우해 二十二前6
ㅎ나ㅎ 한ㄴ히니 六十四前10

『(新訂) 尋常小學』(1896年)

나ㅎ 나히 卷一 十四後6 ㅅㅎ ㅅㅎ 卷二 八後3 시내ㅎ 내에 卷一 十六後1

ところで、『普通學校朝鮮語讀本』の中には、開化期の国語教科書と修身・倫理教科書の、題名および内容が一致するもの、題名は異なるが同じ内容を扱ったものなどが何組かあることを佐野(2013)で言及した。そこで、『普通學校朝鮮語讀本』と修身・倫理教科書である『普通學校學徒用修身書』の表現の近い部分を提示して比較する。

이웃四寸 『普通學校朝鮮語讀本』卷四第一

이웃에갓가이사하는사람들은,엇더한일에든지,서로救助하는일이만은故로,

隣人은四寸 『普通學校學徒用修身書』卷二第二課(1907年)

近隣의사람은諸般事에서로扶助함이만함을니움이니

禮儀 『普通學校朝鮮語讀本』卷五第二十三課82-4-9

禮儀는사람이當然히行할道이며,반다시직힐일이라.萬一禮儀를직히지아니하면,人에게賤待를바들뿐아니라,人으로하야금不快한마음이생기게하는것이니,如何한사람에게對하든지,如何한境遇를當하든지,言語를恭遜히하드며,...

禮儀 『普通學校學徒用修身書』卷三第二課四2-6

禮儀를직힘은人道의씻끗함이라.禮儀를직히지아니하면他人의게賤待를밧을 뿐아니라他人으로하여금不快함만을가지게함이로다.그런즉待人接物에言語를본드시...

『普通學校朝鮮語讀本』には漢字語を別の漢字語に変えている所もあるが、この例では、漢字の意味を解釈してわかりやすく表現していることが窺える。

次に、親族名詞などの他の単語について検討する。

卷一には現代生活ではあまり見られなくなった‘櫃궤三十三34’や‘椅子교의[交椅]三十七38’が絵とともに載っている。‘교의’は現代朝鮮語では‘의자[椅子]’に交替している。‘소제하고(掃除して)卷二 十五38-4’、‘掃除하고卷五 八33-3’は‘청소[清掃]하다’が、‘日氣卷二十九50-2’は‘天氣予報일기예보’などで目にするが、‘날씨’がよく使われている。‘동모[同務]

卷三 三9-6' は '어깨동무竹馬の友' などの合成語で、'벗（友）' 卷六 二十五104-7,9' は主として文語に用いられる⁵⁾。'親舊（友だち）' は '벗' より新しい単語である。'親舊 친구' 卷六 十85-9, 86-1' は本文では会話の文に出てくる。また、'兒童、生徒、學生' は現代朝鮮語ではすべて '學生' を用いるが、卷二 四4から五12に '男生徒、女生徒、予生徒' が見られ、卷三には '男生徒十六46-8' '女生徒十47-1' がある。

金億洙（1979：80-93）は開化期の国語教科書の語彙上の特徴の考察において、漢字語彙は、現代語の語彙と形態が異なり、意味が転成した語彙がかなり多く、また、現代の言語生活で使われなくなったものが多いことを述べ、その例を挙げている。その中には、たとえば、我国（이나라）、交椅（椅子）、誕降（誕生）、学堂（学校）、商賈（商人）、教場（教室）などの『普通學校朝鮮語讀本』本文に含まれている単語も数多く見られる。これらの教科書より2、30年近く後の時代に編纂された『普通學校朝鮮語讀本』には、'교의 [交椅]' のような例も若干あるが、いっそう現代朝鮮語に近い単語が記録され、日常の言葉が収められていると考える。

3. 終わりに

朝鮮総督府編纂『普通學校朝鮮語讀本』本文の語彙と「漢字解」の字訓について、消失した古語をどのように記し、どのような単語が現代朝鮮語に至って使われなくなったか考察してきた。'山되、兄뎡' は「漢字解」には古語 '되、뎡' を留めているが、本文では、他の古語と同様、漢字語 '山、兄' が記されていること、'江마뎡、百은' も漢字語に替わり、'은' は意味変化が起こったこと、漢字語と固有語が共存するものがあること、'아우（弟）、交椅、掃除、日氣、生徒' などの単語は現代朝鮮語では '同生、椅子、清掃、天氣、學生' などが替わって使われるようになったことなどがわかった。これらのことを通して変化してゆく朝鮮語の姿を確認することができる。

言語資料に記録された言語は、その時代よりも前の言語の姿を留めているものである。今後、教科書編纂の経緯を学び、時代を同じくする同様の資料や、前後する時代の資料についても合わせて検討すること、単語の変遷と、語彙と表記の問題についても学んでゆき、異なる視点から語彙の様相を明らかにしてゆくことが課題である。

注

- 1) 佐野（2013：88）参照.
- 2) 全在昊（1992：39-50）参照.
- 3) 柳汶秀（1974）、金億洙（1979）、佐野（1999, 2000, 2003）参照.
- 4) 柳汶秀（1974：69-81）は、開化期の定期刊行物を中心に文章の文体論的考察を行なったが、開化期の文章に現われていた語彙類は開化期の時代精神を明瞭に表出していたと見ている。
- 5) 정길남（1997：172-173）によると、'벗' はすでに15～6世紀でも盛んに現われていた。'친구' は

19世紀末葉にも時折用いられたが、開化期教科書では用いられなかった。

参考文献

- 李基文 (1999) 『新訂版 國語史 概説』, 太學社.
- 金億洙 (1979) 「開化期の 國語教育 實態와 國語教科書 分析 考察」, 中央 大學校 大學院 碩士 學位 論文.
- 佐野三枝子 (1999) 「學部 編纂 國語 教科書와 修身・倫理 教科書의 指示語에 대하여」, 「國際高麗學」5, 71-87. 國際高麗學會.
- _____ (2000) 「開化期の 學部 編纂 네 가지 教科書에 보이는 原因・理由를 나타내는 接續 表現에 대하여」, 「東アジア言語研究」4, 45-60. 東アジア言語研究会.
- _____ (2003) 「話法 動詞에 보이는 漢字語와 固有語의 共存」, 「東アジア言語研究」6, 1-17. 東アジア言語學會外國語學部.
- _____ (2013) 「『普通學校朝鮮語讀本』の表記について」, 「外國語教育フォーラム」12, 87-101. 關西大學外國語學部.
- 趙恒範 (1996) 『國語 親族 語彙의 通時的 研究』, 太學社.
- 朝鮮總督府編 (1923) 『普通 學校 朝鮮語 讀本 卷一』, 朝鮮書籍印刷株式會社翻刻. あゆみ出版 (1985).
- _____ 編 (1923) 『普通 學校 朝鮮語 讀本 卷二』, 朝鮮書籍印刷株式會社翻刻. あゆみ出版 (1985).
- _____ 編 (1923) 『普通 學校 朝鮮語 讀本 卷三』, 朝鮮書籍印刷株式會社翻刻. あゆみ出版 (1985).
- _____ 編 (1924) 『普通 學校 朝鮮語 讀本 卷四』, 朝鮮書籍印刷株式會社翻刻. あゆみ出版 (1985).
- _____ 編 (1924) 『普通 學校 朝鮮語 讀本 卷五』, 朝鮮書籍印刷株式會社翻刻. あゆみ出版 (1985).
- _____ 編 (1924) 『普通 學校 朝鮮語 讀本 卷六』, 朝鮮書籍印刷株式會社翻刻. あゆみ出版 (1985).
- 全在昊 (1992) 『國語 語彙史 研究』, 慶北 大學校 出版部.
- 정길남 (1997) 『개화기 교과서의 우리말 연구』, 박이정.
- 韓國學文獻研究所編 (1977) 『韓國 開化期 教科書 叢書 1』, 亞細亞 文化社.
- _____ (1977) 『韓國 開化期 教科書 叢書 9』, 亞細亞 文化社.
- 朴秉喆 (1997) 『韓國語 訓釋 語彙 研究』, 이회 문화사.
- 柳汶秀 (1974) 「語彙上으로 본 韓國開化期 文章의 文體論的 考察 — 定期刊行物을 中心으로 —」, 高麗 大學校 大學院 碩士 學位 論文.

〈附錄 1〉 各 卷末 附錄「漢字解」に記録されたㄹ末音名詞など（‘ㄹ’は省略する。）

- 卷一 5 山 岬, 산
- 卷二 一-7 女 계집, 녀 男 사내, 남 -8 川 내, 천
 -10 鳳 새, 봉 兄 맞, 형
 二-2 左 왼, 좌 右 우를, 우 -3 野 들, 야 [믹/드르] 道 길, 도
 -5 童 〇히, 동 子 아들, 주 母 어미, 모
 -7 兒 〇히, 히 孩 〇히, 히
 -9 洞 골, 동 [마울 州] 里 마을, 리 [마술] 弟 아우, 데 父 아비, 부
 三-3 天 하늘, 텃 [하늘] 上 위, 상 下 아래, 하 四 녀, 스
 十 열, 십 九 아홉, 구
 -5 秋 가을, 추 [마술] 家 집, 가
 -6 海 바다, 히 -8 陰 그늘 음 [마늘] -10 姬 계집, 히
 卷三 一-8 江 큰내, 강 [마름] 九 아홉, 구 地 싸, 디 方 모, 방
 -9 後 뒤, 후
 二-1 內 안, 너 -6 千 일천, 천 [즈믄] 尺 자, 척 諸 모들, 제 [여러]
 -7 頂 니마, 덩 源 근원, 원 [춤] -9 夕 저녁, 석 [나조] 事 일, 스
 三-3 國 나라, 국
 四-3 京 서울, 경 [서울] 岳 큰뫼, 악 -5 路 길, 로
 -10 百 일백, 백 [온] 五 다사, 오
 卷四 一-7 君 님, 군 叔 아자비, 숙 -8 裏 속, 리 -10 伯 맞, 뵈
 妹 아래누의, 믹
 二-2 陸 못, 룡 -4 梁 들쑤, 량 -6 六 여섯, 룡
 三-7 此 이, 츠 宅 집, 퇴
 四-9 車 수레, 거
 五-5 村 말, 촌 [마슴]
 九-2 考 죽은 아비, 고 妣 죽은 어미, 비 -6 七 일곱, 칠
 卷五 一-3 菜 나물, 채 [나믈] -6 忸나, 오 -7 孫 손, 손 鶯 쇠글이, 앙
 -10 姉 맞누의, 주
 三-1 郡 골, 군 -10 竹 대, 죽
 四-1 週 일해, 주 [닐웨, 닐에] -6 霄 하늘, 쇼 [하늘]
 -8 戶 지게문, 호 -9 邑 골, 읍
 五-2 館 객사, 관 -6 紙 조희, 지
 -10 士 선비, 스 我 나, 아 雄 수, 웅
 六-4 嶽 뫼, 악

- 七-4 紬 면जू, 주
 卷六 一-6 蔬 나물, 소 -9 朋 벗, 붕
 二-7 尼 계집중, 니 魯 로나로, 로 -8~9 興 수레바탕, 여
 三-1 溪 시내, 계 -2 崧 산늬흘, 승
 -8 鼻 코, 비
 四-9 嶠 산늬흘, 교 峽 두뢰, 협
 五-2 途 길, 도 -7 牡 수컷, 모
 六-7 邦 나라, 방

〈附錄2〉『普通學校朝鮮語讀本』に記録されたㄹ末音名詞などの用例の一部(‘ㄹ’は省略する。)

- 나라 卷三 十一33-3 우리나라의 卷三 二十五78-9
 짜 쌍에 卷二 七16-6 卷三 十九56-8, 二十61-7 卷四 五18-2 卷六 七26-1
 하늘 卷二 十三30-6 하늘로 卷三 十七49-1 하늘에 卷三 二十62-9
 길 卷二 四8-3 隱居하러가는길에, 卷四 五15-6 길에서 卷六 十九83-7
 길가의 卷二 十六40-2 길가에서 卷二 二十九77-6~7 卷六 十九83-9
 내 卷一 五十一52-7 卷四 十八66-9 압내 卷三 九26-3
 시내 卷一 三十三34, 五十51-3 卷四 四43-4 卷六 五18-1
 압시내 卷四 九28-6 시내물 卷三 七20-7~8 卷四 九26-5 卷五 四20-6
 山뢰 山 山에 卷三 一3-1 山이오 卷三 十一32-9
 山이나 卷四 七24-3 卷六 五17-7 山과山이 卷四 十三44-5
 먼 山 卷二 十六39-7 卷三 三10-6 붉은山 卷三 一2-9, 4-8
 此山 卷五 十六60-7, 61-5 山岳 卷五 四20-4
 山川 卷二 六13-6 江山 卷六 十七69-8 山中行人 卷六 五17-7
 山河 卷五 二十五92-6
 산 卷一 二十七28 노흔 산 卷一 三十一32-1, 五十一52-6
 뒤동산 卷二 三5-7
 ㅁ술 가을 卷二 二十二58-3 卷三 十四39-2 卷六 二6-6, 八33-2
 가을철 卷二 十九49-4
 ㅁ / 드르 들 卷二 二十四63-4 卷三 三39-7, 十二34-5 卷四 七24-3
 나조 낫 卷二 十三32-2, 4, 6 卷三 十一33-5 卷六 二十四97-8, 99-3
 즐 압즐에도 卷二 三5-6 압뒤즐 卷二 十五38-1 卷三 四12-1, 八22-5
 뒤즐 卷三 八22-8 왼즐에 卷三 十五44-9~45-1 自己 집즐에 卷三 二十63-5
 ~6

뒤	卷二 十四34-5 卷三 八23-2,3 八23-9~24-1 뒤동산 卷二 三 5-7 뒤집 卷三 一 1-5, 八22-5 뒤걸음을 卷二 九21-4 압뒗발 卷二 六15-7
우	卷二 十一24-3 卷三 八24-9, 二十七80-7 卷四 十一36-6 卷五 四15-2 卷六 十九77-1, 77-9, 84-2
안	안에 卷三 八22-6 안으로 卷六 二十六106-2 집안 卷二 十五36-2, 37-3, 37-6, 38-6 윈집 안에 卷三 二十63-7~8 방안 卷三 二十三75-7 卷五 一 2-7, 六27-1
즐	卷三 二十62-2 압즐에도 卷二 三 5-6 自己 집 즐에 卷三 二十63-5~6 윈 즐에 卷三 十五44-9~45-1
여러	여러 가지 卷二 二十二58-7 卷三 三11-4, 十六47-6 卷六 十八81-1 여러 가지가 卷六 二十六106-8~9 여러 가지로 卷三 二十四76-8 卷六 十三49-7, 52-4, 十八78-6~7 十八87-1 여러 가지 일에 卷四 一 3-4 卷五 七30-8, 十39-5, 二十六101-3 여러 마리 卷三 五14-4 여러분 卷六 十八77-3, 二十六108-6 여러~ 卷二 九21-6, 二十五65-3, 二十七71-6, 73-3~4 卷三 二十二68-6 卷六 十 五56-1, 57-2
돌梁	돌쑈에 卷三 五 13-3~4
드르	들이나 卷二 二十四63-4 들에 卷三 十二34-5
그늘	그늘 속에 卷三 四12-8
코	코 卷一 六, 卷五 三 8-9
니마	卷六 十八94-2
나이	주식나세여보기 卷四 四14-7 나이 卷六 二十二89-7
팔	팔 두팔로 卷二 八18-5
암	암컷이오 卷一 六十一69-7 암탉은 卷一 六十一70-3
수	수컷이오 卷一 六十一69-5~6 수탉은 卷一 六十一70-1
수레	차 한 개의 車 二十七71-4 여러車 二十七71-6, 72-2, 3, 6, 73-1, 4
못 / 못ㅌ	못개고리 卷二 六13-5
알	卷三 十七49-2, 49-3, 50-2

數 詞

하나	하나이 卷二 五10-4 어린 兒孩하나를 卷三 二十三71-4 한개를 卷三 二十63-5 한곳 卷三 二 6-3 한洞里 한地方 卷六58-3 한되 卷六 二十七110-1 한마리 卷一 六十一69 卷三 五14-3, 十四39-2~3, 十八
----	--

54-1, 二十三72-8

한마디 卷三 十四42-7, 二十三74-3 -식 卷三 十九58-8

한번 卷四 五17-2 -만 卷六 二十六108-5 한분이 卷二 五12-3

한盆을 卷三 十五45-3 고기 한점 卷三 二十七80-7

한株가 卷三 二十62-8~9

가얌 한톨이 卷三 十八52-5, 54-4 말 한필이 卷三 十七48-7

둘 두가지니 卷五 二十六98-9 두旅行者 卷六 十九83-7

소슴두되 卷六 二十七110-1~2 두마리 卷三 五14-4 두번도 卷六 十九82-7

두사람 卷三 十八51-2, 二十三71-4, 74-4 두生徒 卷二 四9-5

두옴히 卷二 四9-2 두손으로 卷二 五11-1, 2 두팔로 卷二 八18-5

두疋 卷四 五17-1 두쪽 卷三 二7-9

셋 세 마리 卷三 五14-4, 九28-2 세 살씩 卷四 四14-5 세송이 卷三 十五44-6

넷 네 마리는 卷一 六十一69